

脱石油と電源多様化の推進

1973年（昭和48）からの2度にわたるオイルショック（石油危機）は、価格の高騰もさることながら石油の供給不安を招きました。北陸電力は、電力の安定供給を守るために電源の脱石油化戦略を展開し、石油代替エネルギーとして原子力をその中核に据えるとともに、石炭火力、水力開発にも力を注ぎ、電源の多様化を推し進めました。

1984年（昭和59）石炭火力開発として富山新港共同火力発電所の燃料を石油から石炭へ転換しました。その後も、高効率の海外炭を用いた火力発電所の開発に取組む一方、老朽化した石油火力を順次廃止し、設備運用の効率化を図りました。

北陸電力初の海外炭専焼の石炭火力発電所である敦賀火力発電所、七尾大田火力発電所は、それぞれ1991年（平成3）、1995年（平成7）に1号機の運転を開始しました。両発電所とも、主蒸気・再熱蒸気温度を上昇させることで熱効率を向上するとともに、当時最新の環境保全対策設備を導入しました。



富山新港共同火力発電所



敦賀火力発電所

